The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウズベク語の疑問接語miの文法的振る舞いについて : Word Grammarによる分析
Author(s)	吉村, 大樹
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2009, 1, p. 155-183
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6827
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ウズベク語の疑問接語 mi の文法的振る舞いについて
― Word Grammar による分析*―

吉　村　大　樹
YOSHIMURA Taiki

Abstract

On the Grammatical Behaviour of the Interrogative Clitic *mi* in Uzbek : A Word Grammar Account

Unlike its Turkish equivalent *mI*, the so-called interrogative particle *mi* in Uzbek, almost always occurs at the sentence-final position. The question is, therefore, whether the question particle *mi* in Uzbek is an instance of inflectional suffixes or clitics. A traditional descriptive grammar says that *mi* in Uzbek should be treated as a clitic from the viewpoint of phonology, but there has not been any discussion on its syntactic indepedence. Another research question is the relative order of the TAM suffix, the interrogative clitic *mi* and the personal endings. In this article, in order to answer these questions, I shall apply the Word Grammar（WG）framework to Uzbek, and explain the relative order of these elements, arguing that *mi* should be recognised as a clitic, and that the position of mi should best be.

＊　本稿は筆者が 2007 年 7 月に行った大阪外国語大学言語社会学会研究大会で行った口頭発表［吉村 2007b］の内容を大幅に加筆・修正したものである。また，本研究は大阪大学世界言語研究センターによる「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクト，ならびに研究協力者として参加している科研費基盤研究（C）「New Word Grammar 理論（NWG）による英文法研究（研究代表者：菅山謙正，課題番号 20520444）」の支援による研究成果の一部である。
本稿で用いたウズベク語の例文は，引用元が明示されているものを除いて，ウズベキスタン共和国タシケント市に在住のインフォーマント（22 歳男性）に文法性の判断を仰いだ。また，数多くの有益なコメントを下さった匿名の 2 名の査読者，および京都府立大学の菅山謙正先生の各氏に特に感謝の意を表したい。各氏のご協力にもかかわらず，本稿における過失は全て筆者に帰するものである。
本稿で言うウズベク語とは，いわゆるタシケント方言に基づく標準ウズベク語を指す。本発表におけるウズベク語の表記は，ウズベキスタン共和国成立後 1995 年に制定されたラテン文字表記で表わすことにする。若干のずれが時として観察されるものの，基本的に各文字はそれぞれ一定の音素に対応している。各文字（括弧内は小文字）と対応する音素は以下の通りである。A(a)=/a/，B(b)=/b/，D(d)=/d/，E(e)=/e/，F(f)=/f/，G(g)=/g/，H(h)=/h/，I(i)=/i/，J(j)=/ʒ/(/dʒ/)，K(k)=/k/，L(l)=/l/，M(m)=/m/，N(n)=/n/，O(o)=/ɔ/，P(p)=/p/，Q(q)=/q/，R(r)=/r/，S(s)=/s/，T(t)=/t/，U(u)=/u/，V(v)=/v/，X(x)=/x/，Y(y)=/j/，Z(z)=/z/，O‘(o‘)=/o/，G‘(g‘)=/ɣ/, Ch(ch)=/tʃ/，Sh(sh)=/ʃ/，Ng(ng)=/ŋ/. 標準ウズベク語のラテン文字正書法については，［Tog ‘aev（et al.）2004］を参照されたい。また，本文中の例文のグロスの略記号は以下の通りである。1/2/3=1st/2nd/3rd person, Abl=ablative, Acc=accusative, Aor=aorist, Aux=auxiliary, Dat=dative, Gen=genitive, Hon=honorific, Inf=infinitive, Neg=negative, Opt=optative mood, Part=participle, Past=definite past tense, Perf= past perfective, pl=plural, Poss=possessive suffix, Pres=present tense, Q=interrogative clitic, sg=singular.

There are at least three reasons why *mi* should be treated as a clitic：First, not bearing phonological stress, second, a low degree of selection with respect its hosts, and the position relative to the inflectional suffix. In addition to these evidence, taking the scope of question into consideration, a wide network enclosing not only syntax and morphology, but also semantics and phonology is required to explicate the properties of *mi* in Uzbek.

For a morphological account of *mi* in Uzbek, WG defines clitics as units being part of a larger word-form called "host-form". The relative order of the personal endings and the interrogative clitic is properly analysed by morphotactics of the host-form. Ungrammatical cases of host-forms can be explained by saying that the personal ending is an inflectional suffix. Besides these formal properties, syntactic independence of the interrogative clitic is also implied by syntactic dependency. Likewise, the scope of question is illustrated in WG's semantic network, by recognising the relation labeled "scope" between the meaning of a certain word and the predicate of the sentence. The article concludes that WG can straightforwardly and uniformly describe all these facts, from semantics to phonology, about the interrogative clitic.

Keywords：Uzbek language, interrogative clitic, host-form, morphotactics, Word Grammar）

キーワード：ウズベク語　疑問接語　ホスト・フォーム　形態素配列論　ワードグラマー

1．導入

ウズベキスタン共和国を中心に使用されている，チュルク諸語の一種であるウズベク語では，yes-no 疑問文の表示には不変化詞 mi を用いる。同じくチュルク諸語の一例であるトルコ語では，ウズベク語の疑問不変化詞にほぼ対応する形式として，同じく疑問の不変化詞として，mI が用いられる。トルコ語では，文中の任意の語または構成素を疑問のスコープに入れる目的により，疑問不変化詞 mI が比較的自由に文中に遊離するという現象が見られる。しかし（1b，c，d）の例から明らかなように，ウズベク語では疑問不変化詞 mi は文末にしか生起しない。

(1)

a. Ota-ngiz kecha xotin-im-ni ko'r-di-lar-mi ?
father-2pl yesterday wife-1sg-Acc see-Past-Plu（Hon）-Q
「あなたのお父さんは昨日私の妻に会われたのですか？」

b. */??Ota-ngiz kecha xotin-im-ni mi ko'r-di-lar ?

c. */??Ota-ngiz kecha mi xotin-im-ni ko'r-di-lar ?

d. */??Ota-ngiz mi kecha xotin-im-ni ko'r-di-lar ?

生起位置という点では，一見するとウズベク語の疑問不変化詞 mi は文末に生起する場合だけを考察すればよいため，トルコ語よりも単純な記述となるように思われるかもしれない。しかし，ウズベク語の疑問不変化詞をめぐっては，重要な議論が残されたままになっている。その議論とは，この疑問不変化詞 mi が屈折接辞かそれとも接語かという問題であり，我々はこのことを理論的に明らかにする必要がある。[1]

すでに伝統的な記述文法の枠組みによる先行研究で，ウズベク語の疑問不変化詞 mi は屈折接辞と言うよりは，接語であることが指摘されている［Sjoberg 1963：25］。しかし，この指摘は疑問不変化詞 mi が音韻論上強勢を受けないということのみに基いており，疑問接語が有しているはずの統語的性質については何も言及されていない。接語の定義上，接辞と比べて語としての独立性が強いのであれば，そのことについて統語的に何らかの言及がなされるべきであるが，少なくとも筆者の知る限りではウズベク語についてこのことを説明できている理論的枠組みはまだ存在しない。そこで本稿では，筆者の依拠している Word Grammar 理論（以下，WG と略記する）の立場でこのことを具体的に表示および説明することを目標としたい。本稿の分析を待つまでもなく，先行研究の成果を用いてすでに mi が接辞ではなく接語であることは明らかにできるが，本稿の WG の枠組みを用いた分析により，さらに以下のことを明らかにする。

１つは，WG の枠組みでは単純に接語であるとだけしか言及できなかった先行研究と違い，接語であるがゆえに生じる文中の他の語との統語的・形態的関係の複雑性が具体的にどのようなものであるかを明示的に説明できるということである。とりわけ，本稿の考察によりウズベク語の mi は通常の統語論的傾向から逸脱した，特殊な言語単位であるが，この特性は WG の枠組みによってはじめて明らかになる。２点目は，ウズベク語では動詞語幹の時制・相・法接辞（以下，TAM 接辞あるいは TAM 形式と略記する）のタイプによって，人称語尾と疑問不変化詞 mi の相対的な位置が変化するが，WG による接語，また独自の概念「ホスト・フォーム」を用いた分析により，なぜこのような位置の変化が許されるのか，その理由を説明できるということである。例えば，ウズベク語ではある TAM 接辞が用いられる場合は人称語尾，疑問不変化詞 mi のどちらが先に生起しても文法的であるが，別の TAM 接辞では必ず疑問不変化詞が人称語尾に後続しなければならない。このことをどのように説明できるか，WG による分析法を提示することにしたい。さらに３点目として，従来の伝統的な記述文法では必ずしも明示的に表示されなかった意味的な問題，すなわち疑問のスコープの表示という点において，音韻論から意味論までの言

1　トルコ語では疑問詞 mI はウズベク語と異なり，直前の語に対して母音調和効果を示すが，いくつかのテストの結果としてトルコ語の mI が接辞というよりは接語であるとする研究はすでに数多く，ある程度定着した考え方である（[Lewis 1967]，[Kornfilt 1997]，[Erdal 2000]，[Yoshimura 2005］他）と思われる。そのことに注目すると，ウズベク語の mi は直前の語に対して母音調和しないという意味では膠着性が弱いと考えられるから，このこともまたウズベク語 mi の接語性が強いとする根拠としたくなるところである。しかし，この基準をウズベク語に適用してしまうと，時制／相／法接辞をはじめとする，ほとんどの派生接辞・屈折接辞に対しても同じことが言えることになってしまい，逆に接語・接辞の区別が困難になる。また通言語的に母音調和効果のない言語も多数存在するということも考慮に入れると，母音調和効果の有無自体は接語と接辞の区別には決定的な要因とはならないと考えるほうが安全だろう。

語知識を統一的なネットワークを用いて説明する WG の枠組みは従来の説明よりも優れているということを明らかにする。

本稿の構成は以下の通りである。次節で，疑問不変化詞 mi が屈折接辞としてではなく，統語的独立性を伴う疑問接語として記述されるべきいくつかの根拠を提示する。その後，第３節で本稿で用いる WG の理論的枠組みを具体的に提示し，第４節でウズベク語の疑問接語 mi の位置を予測する理論的枠組みを提示する。第５節で，本稿の考察を結論づけることにする。

２．接語（clitic）としての mi

まず，ウズベク語の疑問不変化詞 mi が統語的性質を有しない屈折接辞か，それとも統語的性質を有する接語として記述するべきかを確認する必要がある。本節では，いくつかのデータを提示した上で後者の立場，つまり mi は接語であるとする考え方に正当性を認めることを明らかにしたい。

最初に挙げられる点として，すでに伝統的記述に基づいた文献で明らかにされている通り，mi 自身は強勢を受けないで，常に直前の語の最終音節に強勢を与える［Sjoberg 1963］。これは，ウズベク語における多くの接語が共有している特徴の一つである。Sjoberg は，後接語（enclitics）を“particles and derivational suffixes that normally are weakly stressed.”と定義しており，今問題になっている mi も，疑問を表す不変化詞として後接語の一種と認定されている。

(2)

a. Bu yangí-mi, eskí-mi ?
this new-Q old-Q
「これは新しいですか，古いですか？」

b. Bu-ndan kichik-roq radio yó‘q-mi ?
this-Abl small-more radio “non-existent”-Q
「これより小さいラジオはないですか？」

（2a，b）から明らかなように，mi 自体は強勢を受けず，常に直前の語の最終音節（つまり，mi の直前の母音部分）に強勢を与える。[2] これは Sjoberg が言うウズベク語の多くの cliticsが有する特性のひとつであり，このことは少なくとも接語であることをを説明する上での必要条件の１つであると言うことはできるだろう。

２点目に，疑問接語 mi は自らが後続する語の属する語類の選択性が低い。つまり，mi が特定の語類を要求するかどうかという点において，mi はそれほど強い選択制限性をも

2　実際の発話では文のイントネーションが mi の部分で上がる場合があるが，強勢の位置は当然ながらイントネーションとは区別して考えることにする。

たず，名詞や動詞など，屈折接辞と比べてやや広い許容範囲を有している。このことは，mi が（屈折的）接辞というよりもむしろ，接語としての性質を有していることの根拠となりうる。なぜならウズベク語やトルコ語のようないわゆる膠着型言語では，屈折接辞は通例その語彙が有する文法的カテゴリーを具現化していると言うことができるが，ある形式が複数の語類に後続できるということは，その語彙が要求する文法的カテゴリーを具現化しているとは考えられないからである。(3) の各例から, mi は少なくとも名詞, 形容詞, 動詞，さらには後置詞にも直接付着できることがわかる。

(3)

a. U-lar student-lar-mi？（名詞）
he/she-Plu student-Plu-Q
「彼らは学生ですか？」

b. Karim-ning telaffuz-i yamon-mi？（形容詞）
Karim-Gen pronunciation bad-Q
「Karim の発音はよくないですか？」

c. Siz o'zbekcha bil-a-siz-mi？（動詞）
2sg Uzbek know-Pres-2sg-Q
「あなたはウズベク語がわかりますか？」

d. Bu kitob student-lar uchun-mi？（後置詞）
this book student-Plu for-Q
「この本は学生のため（のもの）ですか？」

これと対照的に，現在時制を表わす典型的な屈折接辞 -a（母音に後続する場合は -y）は動詞にしか後続することが出来ず，(4) で示すように，名詞や形容詞には隣接できない。また，助動詞 e- にも後続できないことから，この接辞は語彙範疇の選択制限が強いことがわかる。つまり，どのような語類に属する語を直前の語として要求するかは，かなり限定的である。

(4) Biz kasal-miz. / *Biz kasal e-y-miz.
1pl sick-1pl 1pl sick Aux-Pres-1pl
「我々は具合が悪いです」

これらのデータも，mi の統語的独立性を示す証拠を与えることになるだろう。つまり，mi は様々な語彙が要求する屈折接辞ではなく，直前の語に対して独立性の強い言語形式であると考えることができるのである。

mi が接語であると主張する根拠の３点目は，mi の生起位置の制限性である。(5) に示すように，述語が mi を含む複数の語尾を含むとき，mi は常に屈折接辞の外側に生起する。

従って屈折接辞（ここでは２人称単数接辞 -ngiz）に mi が先行した場合，非文法的であることが容易に予測できる。

(5)

a. Nonishta qil-di-ngiz-mi？/ *qil-di-mi-ngiz？
breakfast make-Past-2sg-Q
「朝食をとりましたか？」

このような生起位置の制約は他言語の接語に関する現象でも指摘されていることであり，接語が有する特性の一つと考えてよいと思われる。

ところで，ウズベク語では疑問接語と人称を表わす形式の相対的位置がずれるという現象が見られる。たとえば（6a）のように，通例完了相を表わすとされる -gan/-kan 形式が動詞語幹に添加された場合，人称語尾と疑問不変化詞の相対的位置はどちらが先行しても文法的である。一方，（6b）のように現在・未来時制を表わすとされる -a/-y 形式が動詞語幹に膠着した場合は人称語尾が先行し，疑問接語は人称語尾に後続しない場合，容認度が極端に下がる。[3]

(6) a. Siz hech Tarix Muzey-ga bor-gan-mi-siz？/ bor-gan-siz-mi？
you ever History Museum-Dat go-Past-Q-2sg / go-Past-2sg-Q
「あなたは今まで歴史博物館に行ったことがありますか？」

b. Siz futbol-ni yaxshi ko‘r-a-siz-mi？/（*/??）ko‘r-a-mi-siz？
you-Nom football-Acc good see-Pres-2sg-Q see-Pres-Q-2sg
「あなたはサッカーが好きですか？」

さらに，（7）に示すように他の TAM 接辞が用いられる場合，その形式に従って人称形式も別の系列が選択される。ほとんどの場合，疑問接語は常に人称形式に後続する。

(7)

a. ol-di-ngiz-mi？
get-Past-2sg-Q
「（あなたは）手に入れましたか？」

b. *ol-di-mi-ngiz？
get-Past-Q-2sg

c. so‘ra-y-mi？

3　発表者が参照したウズベク語インフォーマントの１人より，ウズベク語の方言によってはこの種の TAM 接辞が選択された場合でも疑問接語が人称語尾に先行するような発話が見受けられるという指摘をいただいた。このことは興味深い事実であるが，この場合でも人称語尾は接語代名詞の一種であり，必ずしも疑問接語が接語代名詞に後続しなければならないわけではないと説明できるため，上述の主張に対する反例とはならない。

ask-Opt：1sg-Q

「（私が）聞きましょうか？」

d. *so‘ra-mi-ay？

ask-Q-Opt：1sg

（7a, b）では動詞 ol- に定過去接辞 -di がTAM接辞として用いられている例であるが，（7a）が示すようにどのような動詞語幹であっても，人称語尾は常に疑問接語に先行する。したがって（7b）のように，疑問不変化詞 mi が人称語尾 -ngiz に先行すると非文法的となる。同様に（7c, d）は動詞 so‘ra- に希求法１人称単数接辞 -ay が後続する例であるが，このときも疑問接語 mi は必ず人称を表わす -ay に後続しないといけない。

今提示した，（6）（7）の各例からもすでに明らかになってはいるが，ウズベク語の人称語尾には互いに異なる系列が存在するということをもう少し詳しく見ておこう。表１で示すように，一般にウズベク語には４種の人称語尾系列が存在すると言われている。

表１

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
1sg	-man	-man	-m	-ay（-y）
2sg	-san	-san	-ng	---
3sg	---	-di（-ti）	---	-sin
1pl	-miz	-miz	-k	-aylik（-ylik）
2pl	-siz	-siz	-ngiz	-ing（-ng）
3pl	-lar	-dilar（-tilar）	-lar	-sinlar

表１で提示した各系列は，動詞の TAM 接辞の種類に従って選択されるⅠ類，Ⅱ類の人称語尾系列は，３人称形式 -di/-ti の有無を除いてほぼ同じであるが，Ⅲ類またはⅣ類の人称語尾系列は，前２者と対照してみるとかなり類似性が認めにくい形式である。ここで確認しておきたいのは，表１で提示した人称語尾系列のうち，いずれの系列が用いられるかによって人称語尾と疑問接語との相対的位置がかなりの程度予測できることである。

少々具体的に言うと，Ⅰ類の人称語尾が用いられた（6a）の例のような場合は TAM 形式の種類により，人称語尾と疑問接語の位置はどちらが先行していても文法的に問題ないことがある。[4] 一方Ⅰ類と類似していながらも，音形を伴う３人称単数の形式 -di（-ti），ま

4　筆者が任意の動詞に各 TAM 形式を後続させ，さらにその TAM 形式に対応した人称語尾と疑問接語との位置を変化させて前述のウズベク語インフォーマントに確認したところ，Ⅰ類の人称語尾の場合でも文法性の判断にはかなりばらつきが見られた。このことは，人称語尾と疑問接語との位置の違いにより意味が変化している可能性があるか，あるいは動詞の意味やインフォーマントがその動詞についてイメージした文脈により文法性の判断が変化している可能性があることを示している。ただ，意味の変化がどのようなものであるのか，あるいは意味の変化自体が本当に

たは３人称複数形式 -dilar（-tilar）が存在するⅡ類人称語尾系列が用いられている（6b）のような例では，Ⅰ類系列の場合とは異なり，疑問接語は人称語尾に後続している。このことから，Ⅰ類の人称語尾は接語であるが，Ⅱ類の人称語尾は接辞であるとみなすことも可能かもしれない。しかしながら，Ⅱ類の人称語尾も他の接語と同じく，（直前に疑問接語が来ない限り）音韻論的語強勢を受けないことや，話者によってはⅡ類の人称語尾と疑問接語との相対的位置が逆転していても容認可能な場合があること（脚注４を参照），またⅠ類との形式が相当に類似していることを考慮に入れれば，両者の言語単位としての地位が異なるとみなすことが合理的であるとは考えにくい。よって，Ⅰ類，Ⅱ類のいずれの形式も，接辞ではなく接語であると考えるのが妥当であると思われる。

Ⅲ類，Ⅳ類の人称形式が選択された場合は，疑問接語は必ず人称形式に後続しなければならない。以上のことから，Ⅰ類の人称語尾系列と，３人称の形式以外はほぼⅠ類と同じ形式のⅡ類に属する各人称語尾はいずれも接語代名詞であり，Ⅲ類，Ⅳ類は接語的性格をいかなる意味でも有さない人称を表す屈折接辞であるとひとまずまとめることができる。[5] このように仮定することにより，後述するように人称語尾と疑問不変化詞 mi との相対的位置を予測することがかなり容易となる。

ここまでの議論から，ウズベク語の mi を屈折接辞としてではなく，接語の一種であるとみなす妥当性は十分にあると考えてよいと思われる。人称語尾と疑問接語（つまり mi 形式）との相対的な位置のずれは，結局は動詞が有する TAM 形式の種類が何であるかによって，その順序が厳密に定められるかどうかが決定されると考えられる。このことから，疑問接語にせよ人称接語にせよ，その相対的位置を統語論的に説明するよりは，２つの接語を含むより大きな語が有する内部規則に従っていると説明するほうが妥当であると思われる。

３．統語論的問題

ひとたび mi を接語であるとみなせば，mi は音韻論的には別の語の一部であるかのように振舞いつつも，統語的には他の語とは独立して振舞う言語単位，より具体的には直前の語を支配する機能語の一種であると考えられる。ここで問題になるのは，このとき疑問接語 mi がどのような統語的関係を他の語に対して有するかということである。

本稿の冒頭でも述べたように，トルコ語と異なりウズベク語では疑問接語 mi の生起位置は常に述語の部分に生起する。したがって，mi が何らかの統語的関係を有するならば，その関係は唯一，述語部分との関係であると言える。つまり，問題は統語論上述語部分と

存在するのか，現段階では残念ながら筆者には解明できていない。この点については，今後被験者の数を増やすなど，さらに精密な調査が必要であることを認めるが，いずれにせよここで述べたように人称語尾と疑問接語との相対的な位置が逆転できるような動詞の TAM 形式は，すべてⅠ類の人称形式を選んでいることに本稿では注目したい。

5　同じくチュルク諸語のうち，トルコ語の人称形式についてすでに［Good and Yu 2005］でも人称形式を接語代名詞の系列と人称接辞の系列とで区別して考えるべきであるとしている。本稿で用いている，WG の枠組みによるトルコ語の人称形式と疑問接語の相対的位置の議論については［Yoshimura 2005］を参照されたい。

疑問接語のどちらがもう一方を統語的に支配するかということであり，可能性としては（i）mi が述語部分を統語的に支配するか，または（ii）述語部分が mi を支配する，つまり mi は統語的に述語に依存しているか，の２通りが考えられる。以下，この２つの可能性についてそれぞれ検証してみたい。

疑問接語 mi を直前の語に対する統語的主要部であるとみなす根拠は，まず第一にウズベク語は多くのチュルク系言語と同様に，強い主要部後置の傾向をもつことから，この主要部―依存語の位置関係が mi の場合にもそのまま継承されると主張できることが挙げられる。もう１つの根拠は，多くのトルコ語の先行研究［Lewis 1967, Besler 2000 他］が述べるように，トルコ語において意味的に mI が直前の語を疑問のスコープにとるという説明が，同じチュルク系言語に属するウズベク語にも適用されうる，というものである。つまり疑問接語 mi が，意味的にはある別の語を疑問のスコープに入れると考える場合，疑問のスコープに何らかの語が入るのを要求しているのは mi のほうだというのである。そのことが統語的にも反映されているとすれば，なるほど確かに疑問のスコープに入る述語は疑問不変化詞に依存していると考えることができるかもしれない。また，別の意味論的観点からも，疑問不変化詞のほうが直前の語に対する主要部であるとする根拠が見出せるかもしれない。たとえば，（8）の例について考えてみることにする。

（8）

a. big book

b. kel-di-ngiz -mi？
come-Past-2sg-Q
「（あなたは）いらっしゃいましたか？」

英語の例（8a）では big book の指示対象は book の下位語であり，big の下位語とは言えない。同様にウズベク語の（8b）の例では，kel-di-ngiz と mi とが組み合わさった構造，つまり kel-di-ngiz-mi のもつ意味は，keldingiz という動詞によって示される出来事の１種を指し示しているというよりは，question の１種を指し示していると考えられる。これを根拠にしつつ，ウズベク語で強い主要部が補語に後置される傾向を考慮に入れるならば，mi を統語的主要部と考えることは十分可能かもしれない。

しかし，以上のような根拠にも関わらず，統語的には主要部後置の傾向から逸脱する形で，述語のほうが疑問不変化詞 mi を統語的に支配しているとする考え方のほうが有効である。この主張は議論を呼ぶ可能性があるが，本稿ではあえてこの立場をとることにしたい。その根拠となる点は，以下の４点である。[6]

6　この主張は，［吉村 2007b］とは全く逆の主張である。本稿では紙面の都合もあり詳しく論じないが，ここで指摘した４つの根拠に加えて，トルコ語における疑問接語の説明との統一性を考慮に入れる上でも，mi が統語的に直前の語（つまり述語部分）に依存しているとするほうがより確実である。トルコ語の疑問詞 mI が文中に遊離する現象はその文の述語（動詞）によってその生起位置を可能としている。もし，この考え方が正しいとすると，このこととの並行性，形式・

1点目は，mi が存在しなくても構文は成立することである。これには，構文の成立そのものが mi なしでも成立するという意味だけでなく，ある程度厳しい語用論的制約がある（つまり，談話の状況がかなり限定される）ものの，以下のように実際の会話における yes/no 疑問文においても，mi が省略されることがありうる，という意味でもある。[7]

(9) A： Men uy-ingiz-ga kel-moqchi-man.
I-Nom house-2pl-Dat come-want to-1sg
「私はあなたの家に行きたいです」
B： Siz kel-moqchi-siz？
you-Nom come-want to-2sg
「あなたが来たいですって？」

疑問接語 mi が具現化されるかどうかは，少なくとも発話時の文脈に大きく依存すると考えられるが，(9) の例における話者 B の発話が自然であることを考慮に入れるならば，この発話が yes/no 疑問文の一種であるにもかかわらず，mi が動詞部分を統語的に支配しているという根拠が（少なくとも表面的には）見当たらない。

1点目の根拠と関連するが，mi が述語に支配されていると考える2つ目の根拠は，(10) で示すようにウズベク語の疑問を表す形式は mi だけではなく，相手に聞き返すときなどに用いられる chi, 付加疑問文的に用いられる a といったものが実在するということであり，どの形式が使われるかは発話時の文脈により決定されるということである。

(10) a. Siz uy vazifa-si-ni tugat-di-ngiz-**mi**？
You-Nom home work-3sg-Acc finish-Past-2pl-Q
「あなたは宿題を終えましたか？」
b. Men kecha kechqurun kel-di-m. Sen-**chi**？［Bodrogligeti 2003：1017］
I-Nom yesterday afternoon come-Past-1sg You-Q
「私は昨日夜遅くに来ました。君は（どうでしたか）？」
c. Bor-a-san-**a**？［Bodrogligeti 2003：1017］
go-Pres-2sg-Q
「（君は）行こうとしているのだね？」

機能上の互いの類似性を明らかにするためにも，ウズベク語の mi はトルコ語の mI と同様，述語に依存しているという考え方ができる。このことについての議論は，［吉村 2008］を参照されたい。なお，トルコ語において疑問接語 mI が文の中心となっているとする考え方については［Besler 2000］を参照されたい。

7 ここでの考察とは直接関係がないが，例文 (9) の動詞部分 kelmoqchiman の部分について，本稿では形態素 -moqchi を一つの形態素と見なしているが，より細かくこの部分を不定詞化形態素 -moq と，名詞派生形態素 -chi の2つに分割することも可能かもしれない。このとき，語類が派生により動詞から名詞へと変化したと考えるならば，名詞述語には通常人称接語しか付着しないため，なぜこの TAM 形式を選択した場合に人称語尾が接辞でなく接語であるのかが説明できる。

このことも，miが統語的に直前の語を支配していると考えることが難しい理由である。比較のために英語の例を出すと，“Do you like baseball?”という疑問文に対して，助動詞doと本動詞likeとの統語的支配関係を考えるとき，多くの研究者が助動詞doのほうが主要部であるということに同意すると思われるが，そのようにみなす根拠の一つとして，この疑問文に対する返答として“Yes, I do.”は文法的だが“*Yes, I like.”とはならないということがある。つまり，単独で生起できるかどうかは主要部のもつ重要な特性の一つであり，少なくともmiがこの特性を有していないことは明らかである。

３点目として，ウズベク語の疑問のスコープはトルコ語とは違ってmiが移動するのではなく，音韻論的語強勢によって表示されるため，miの直前の語との統語的関係は疑問のスコープを直接表示する手段にはなり得ないことが指摘できる。

(11) a. Siz 1977-yil-da **TUG'-IL-GAN**-mi-siz?
You-Nom 1977-year-Loc give birth-Pass-Perf-Q-2pl
「あなたは1977年に生まれたのですか？」

b. **SIZ** 1977-yil-da tug'il-gan-mi-siz?
「あなたが1977年に生まれたのですか？」

c. Siz **1977-YIL-DA** tug'il-gan-mi-siz?
「あなたは1977年に生まれたのですか？」（「1977年」の部分が強調されている）

(11) の各例では，音韻論的強勢を受ける部分が便宜的に大文字で表示されているが，これらの例はそれぞれ同じチュルク諸語の一種でありながら，トルコ語の疑問接語mIとウズベク語のmiとでは，疑問のスコープの表示の仕方が全く異なることを示している。したがって，先ほどmiを直前の語を支配する主要部であるとする主張の根拠に，疑問のスコープを表す意味論的根拠がありうると述べたが，実際には少なくともウズベク語に関して言えば，このことはmiが統語的主要部であることを示す根拠にはなりえない。つまり，ウズベク語においては疑問のスコープの表示は音韻論的強勢によって具現化されるのであって，統語的な支配関係にスコープ関係が反映されているとは必ずしも言えないのである。

最後に指摘しておくべき「述語主要部説」の４点目の根拠は，もし述語部分が接語代名詞（本稿で言うⅠ類，Ⅱ類の人称語尾）を有しており，かつ疑問接語が接語代名詞に後続する場合，その説明がきわめて困難になってしまうことである。たとえば（6a）の例で述語部分がbor-gan-mi-sizとなった場合，述語の主語を表すsizを統語的に支配しているのは動詞部分borganなのか，miであるのかがたちまち問題となる。もしsizの主要語がmiであるとすれば，その統語的関係は具体的には何か？仮に，直観的に主語の関係であるとしても，本当にmiに主語を要求する資格があるだろうか？さらに，miの語類（品詞）は何なのか，borganとsizの関係はどう説明するのか，そもそもこの構造自体が統語的に不連続構成素になっているのではないか（つまり，borganと主語sizが構成素を形成しないといけないのに，miがその連続性を阻害しているのではないか）など，途端に複

雑な（しかも解答が困難な）問題が数多く生じることになってしまう。[8] 疑問接語 mi が述語部分に統語的に依存すると考えれば, このように問題を複雑にしないですむ。すなわち，疑問接語も接語代名詞も，どちらも述語部分に統語的に依存しているのであり，そのように考えればこの構造は全く不連続構成素とはならない。[9] 以上の考察から，本稿では mi を述語，または述語が究極的に表示している文脈が要求する語（依存語）であるとみなす考え方が優位であることを指摘しておきたい。

以上の議論を踏まえて我々がこれから解決するべき問題は，理論的観点から疑問接語 mi 自身の統語的独立性と形式的な接辞的性格とのミスマッチをどのように表示・説明するかということになる。我々はいかなる理論的枠組みを採用するにせよ，このことに対して何らかの解答を提示する必要がある。以下，この問いに対する本稿の立場からの解答を提示していきたいが，詳細な議論に入る前に，次章で本稿の議論に必要な WG の具体的な理論的装置を提示しておこう。

４．Word Grammar

ここから，筆者が支持する WG の立場では，これまでに提示したウズベク語の疑問接語を具体的にどのように記述・説明するかを提示することにしたい。その前に，本稿の議論に必要な限り WG がどのような理論的装置を用いるかを簡単に解説しておきたい。

(1)　言語知識のネットワーク

WG では，言語知識は言語話者が有する知識の実体が網の目のようにして形成されたネットワークのようなものであると考える。WG のネットワークは，このような無数の言語実体の個々に対応するノードと，それらを相互に関連付けるリンクの２種によって構成されている。

本稿の議論で導入する WG のネットワークの特徴の一つは，ある語彙を表すノードと，その語彙が関連する具体的な形式を示すノードとを厳密に別々の概念として区別することである。語彙レヴェルの段階では，語彙はいくぶん抽象的・一般的な概念であり，各語彙の有する意味と直接関連付けられたり，またはどのような語類に属するかといった情報と直接関連付けられる。この抽象的な語彙という概念が具体化されたものが形式（Form）であり，形式レヴェルのほうでは形式（Form）はある語彙が具体的にどのような語形変

8　しかし，仮にこのような問題を設定したとしても，生成文法の枠組みなどでは raising などの枠組みを用いて，たとえば元々は VP 内部にあった主語代名詞が mi を主要部とする任意の統語範疇の外側にある CP または IP といった別の統語範疇の主要部の位置に移動した，などと分析することも十分可能だろう。本稿では言うまでもなく WG の枠組みを利用するため，今問題になっている現象の説明に移動・変形のような理論的枠組は必要がないと考える。

9　人称接語も疑問接語も，通常の統語論でその位置を説明できない special clitic の一種であるとみなせば，統語的には不連続構成素を形成しても理論上問題はない。しかし，だからといって不必要に統語的説明を複雑にする必要もないはずであり，統語的な異質性の説明を省くためにも，人称接語・疑問接語両者がその位置を述語部分に決定されていると考える方が合理的であると考えられる。

化を示すかといったことや，どのような音韻構造を有しているかといった情報と直接的に関連付けられる。WG では通例，語彙項目は小型英大文字で表示し，各語彙項目が具現化された形式については伝統的な表記法に従い，いわゆる中括弧で囲うことで標示する。本稿でもこの表記法に従うことにする。

例えば，英語の語彙 CAT の具現化を例にとってみよう。[10] 先ほど述べたとおり，語彙項目 CAT は幾分抽象的な概念であり，この語の意義（sense）が猫であること（これを便宜的に‘cat’と表わすことにする），さらにこの語が具体的にある事物を指し示しており，その事物は‘cat’の一種であるといった意味的な各概念とのリンクが認められる。また，語彙レベルでは CAT は名詞の一種であり，屈折という側面では複数名詞（Plural noun）の一種でもあることが表示される。よって，語彙項目 CAT：plural というノードは，名詞（Noun）かつ複数名詞（Plural noun）の有する特性を両方継承した概念であり，このようなカテゴリー間の上下関係は WG のネットワークでは上位ノード（ここでは CAT, plural）から下位ノード（同じくここでは CAT：plural）へ向かって三角形のついた直線を用いてあらわされる。さらに，語彙レヴェルでのノード（または語彙レヴェルと Plural noun の両方の特性を継承したノード），CAT：plural が形式レヴェルで具現化されると {cats} となり，さらに具体的に，その音声は［kæts］と記される。このようにして，相対的に抽象的な概念である語彙素 CAT は，それ自身を中心として意味・形式といった様々な概念にリンクする。以上の情報は，WG の枠組みで図１のようなネットワークの形で表示することができる。

10　以下，本稿では語彙素について具現化された語よりも抽象的な概念であることを示すため，小型英大文字で表示することにする。

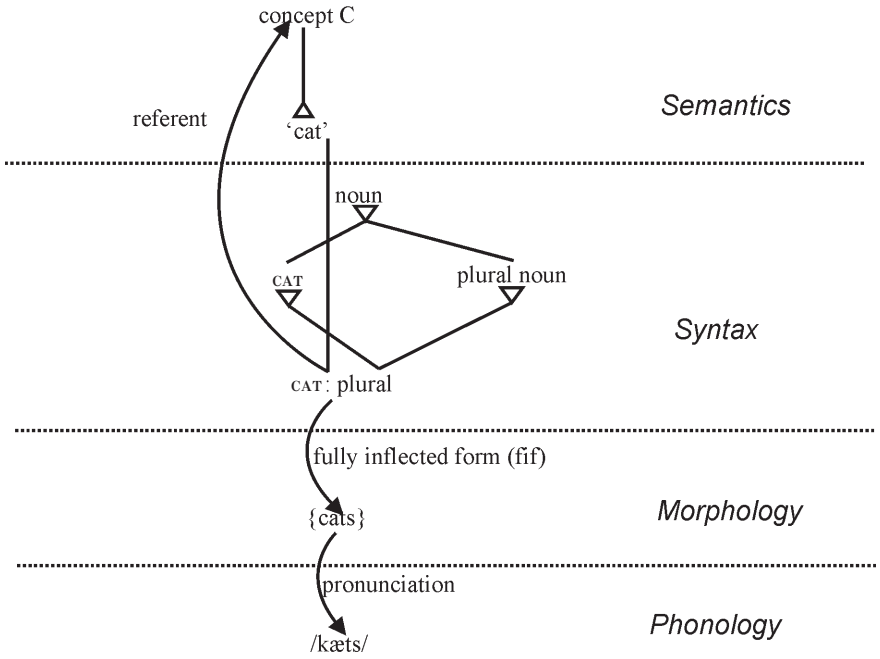

図 1

図 1 から明らかなように，単独の語彙 CAT（又は Plural という屈折カテゴリーの特性も継承した CAT：plural という語彙概念）だけでも，それに関連した豊富なネットワークの存在が確認される。構文は各語が互いに何らかの関係をもちつつ構成されたものであるが，WG ではこれらの個々の語の関係についてもネットワークの枠組みで表示する。この結果として，統語論の表示には句構造ではなく，単語どうしの依存関係という概念を用いる。これは多くの文法理論で，統語構造を句構造に基づいて分析する立場とは大きく異なるが，このような依存関係に基づいて統語的説明を行うということは，言語を知識のネットワークとして考える立場からすれば，当然の帰結と考えることもできる。

すでにここまでである程度明らかになっていることであるが，語彙と形式を区別しておくことは接語の説明にとって重要な点である。形式レベルでの概念と抽象的な語彙レベルの概念を区別することで，それぞれに他の概念との関係を（つまり，語彙レベルでは他の語との統語的関係，形式レベルでは語幹部分と語形変化形全体との関連性を）矛盾なく表示することができる。

(2)　概念の分類と isa 関係，デフォルト値継承原理

WG の枠組みでもう一つ重要な概念は，各概念のカテゴリー化について述べる isa という関係である。その名が示す通り，isa 関係とはある 2 つの概念のモデル＝インスタンスの関係を表わすものである。図 2 の左図で示したように，ある概念（A）が別の概念（B）の 1 種であるとき，“A isa B”と記す。WG の表記では A isa B という関係を，上位概念

のＢからＡに向かって三角形に接した直線で表示する。[11] この表示により，例えば非言語的知識としてある言語話者が有している「猫の種類」に関するカテゴリー関係と，言語的知識としての「英語の動詞」のカテゴリー関係とは，図２の中央図，右図でそれぞれ示したように同一の手法で表示される。

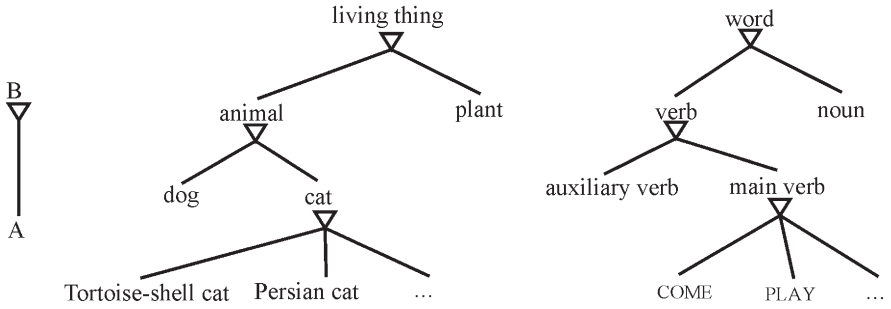

図２

Ａ isa Ｂが成り立つとき，Ａは特殊な事実がない限りＢが有する全ての特性を継承（インヘリット）する。WG の枠組みでは，これをデフォルト継承（Default Inheritance）と呼び，理論内部における重要な部分と位置づけている。

以上が，本稿の議論に関して必要となる WG の基本的枠組みである。次節から，ウズベク語の接語を詳細に説明するために用いる理論的枠組みを構築していきたい。

５．分析

(1) ウズベク語の疑問接語・人称語尾と「ホスト・フォーム」

ウズベク語の疑問接語 mi の分析において最初に明らかにしておくべき問題は，ウズベク語の疑問接語そのものをどのような単位として記述するかということである。つまり，我々は mi が接語であるとしたとき，接語とは言語知識のネットワークの枠組みでどのように説明されるかという問題を考えなければならない。果たして，接語は語や接辞などといった概念とどのように関連すると言えるだろうか？より具体的に言い換えるならば，mi が「直前の語が具現化した形式の一部である」のか，それとも「mi を含むより大きな語形の一部である」とするのか。我々はまず，このことについて明確にしておく必要がある。

WG の立場からの解答として選択されるのは，疑いなく後者のほう，つまり疑問接語は，それ自身を含むより大きな語形があると仮定し，少なくとも形態論上はその大きな語形の一部分となっていると考える。なぜなら，前節でも述べたことであるが，接語はいかなる

11　カテゴリー間の isa 関係を表わす三角形は，常に上位概念のほうに底辺が向いており，下位概念に向かって頂点から延びた直線が向かっている。このことが守られていれば，表記上ＡとＢの位置は上下左右いずれが逆になっていても，その情報の内容は同じである。

意味でも直前の語の一部（つまり，直前の語の屈折形式）とは言えないからである。むしろ，そのように考えるよりは接語と接語を含む語形からなるより大きな語形が存在し，接語もその直前にある語形も，より大きな語形の部分を構成すると考えるほうがよい。ここで言う，より大きな語形を WG の最近の枠組みではホスト・フォームと名づけている。接語，ホスト・フォームの形態的情報は WG のネットワークの枠組みを用いて容易に表示することが可能である。まず，一般的な語形（Word-form）と接語（Clitic）との関係について，1 人称単数接語 man と，独立形式の men との関係を図 3 に示してみよう。

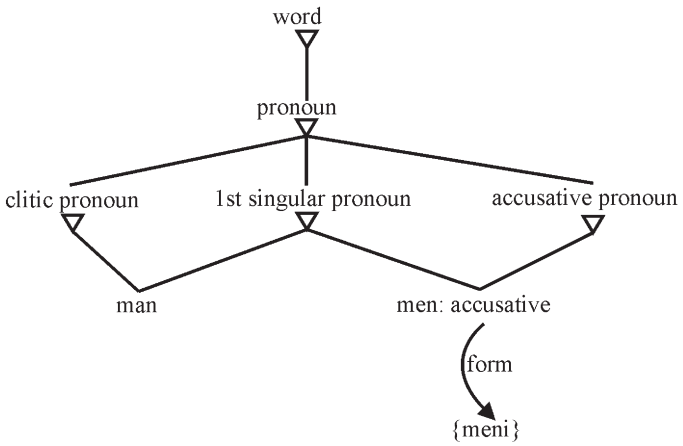

図 3

図 3 は，語の下位概念を表示したものである。WG の枠組みでは通常，語の内部構造は語彙素（lexeme）と屈折部分（inflection）の 2 つの概念を用いて説明され，独立形式としての一人称単数代名詞の語彙素 MEN の特性と，代名詞の屈折パターンとしての対格代名詞の特性とを同時に継承したノードを便宜的に MEN：accusative として表示することができる。これらの概念が形式として具現化すると，{meni} となるとする。以上のことが図 3 では全てネットワークで表示されている。

では，ホスト・フォームとは何であり，何のために導入するのかについて説明しておこう。接語が存在するとき，その形式的な情報は常にホスト・フォームの枠組みで説明されることになる。従って，ホスト・フォームを便宜的に，例えば接語を含む形式であると規定することも可能である。しかしより一般的な観点に立って，ホスト・フォームは言語知識における形式という概念のうち，固定化された意味での語彙を有しないという意味で典型的とは言えないが，内部構造を有し，音韻論上も強勢を受ける部分を最低 1 か所有しているなど，さまざまな特性を共有していることから，ある語彙の具現化された形，すなわち語形（word form）の一種であると言うこともできる。前節（2）で言及した，WG のカテゴリーの分類の枠組み，つまり isa 関係による階層を用いれば，単語や接語の各形式に関連したカテゴリー間の上下関係は，図 4 のように表示できるだろう。

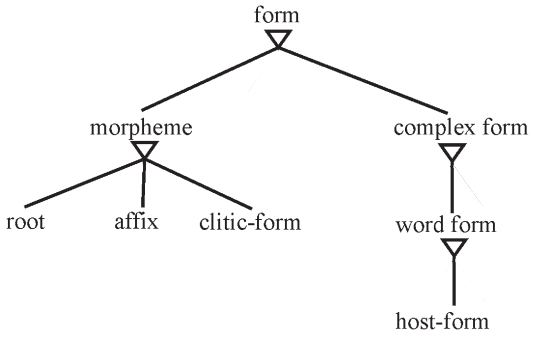

図４

ところで，WG における isa 関係は単に２つの言語実体（カテゴリー）間の上位・下位関係（モデル・インスタンスの関係）を表しているのであって，ある上位カテゴリー A に２つの下位カテゴリー B, C が isa 関係をもつとしたとき，たとえば Stratificational Grammar（以下，SG）のネットワークで説明しようとしている syntagmatic/paradigmatic な関係の区別については，isa 関係それ自体は何も説明しないし，する必要はない。[12] たとえば，ある任意のカテゴリー A を上位カテゴリーとしてもつという点で共通している，異なる別の概念 B, C どうしの関係をどのように表示するのかが問題になるとするなら，SG と違い，WG の枠組みでは，B と C の関係は isa 関係ではない別のネットワーク（三角形のついていない曲線の矢印）で表示することになる。WG では，isa relation は概念どうしをリンクするパターンのうちの（重要ではあるが）１つの可能性でしかなく，それ以外の圧倒的多数の２つの概念（ノード）は純粋な「関係」（つまり，曲線の矢印）によって関連付けられる。complex form と morpheme との paradigmatic な関係は，英語の例 acceptable の有する形式，｛acceptable｝を例にとるならば，WG のネットワークの枠組みで図５左図のように表示される。同様に root と affix の syntagmatic な関係については，やはり英語の例 ｛aimlessness｝を例にとれば，WG のネットワークでは同じく図５右側のように表される。

12　この部分は，WG における isa 関係の表示に関する匿名の査読者から指摘していただいた疑念に対する解答である。すなわち，同じくネットワークを用いた枠組みで，Stratificational Grammar（Lamb 1966）との違いについて加筆している。同氏に心からの謝意を表明しておきたい。

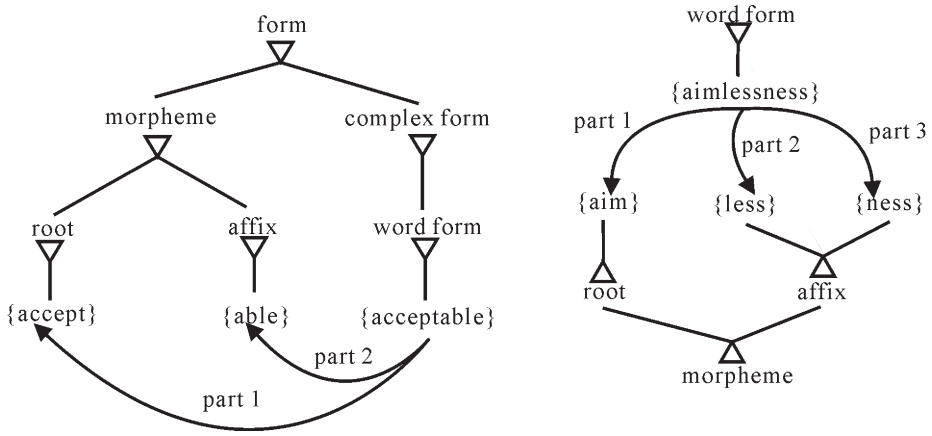

図５

概念どうしの関係を統一的な手法を用いたネットワークで表示しようとする点では WG も SG も共通しているが，ネットワークの構築・表示の手法としては SG も一つの可能性として興味深いが，ここまでの説明から明らかなように，WG は isa relation だけで全ての概念動詞の関係を説明しようとしているわけではない。この点は両理論の説明方法の違いによるものに過ぎず，WG が SG と比較して説明力が劣るとは言えない。むしろ，morpheme と complex form との関係が単に paradigmatic であるというだけでなく，complex form が morpheme を自らの構成部分の一部として有することが表示できているという点では，WG のほうが優れているということすら可能かもしれない。

ホスト・フォームが語形（word-form）の一種であるとする考え方は，ある任意の語と接語との組み合わせが，複合語の説明と平行していることを表示する上でも有効である。例えば，ウズベク語の複合語の一例として MEHMON-XONA（guest-room「ホテル」）という語彙の形態論的構造を考えてみると，この複合語は少なくとも３種の語，つまり MEHMON（“guest”），XONA（“room”），そして MEHMONHONA という３つの語彙が相互関連していると見なすことができる。今問題になっている接語とホストフォームの関係は，複合語に関するネットワークとかなりの点で類似しており，このことは図６のように両者を比較することで明らかになる。[13]

13　図６の右側のネットワークでは，ドット（•）で表示されたノードがある。WG のネットワークでは，そこに何らかの実体が存在することが明らかであるが，どのように呼べば（名づければ）よいか不明なノードをこのように単にドットで表示する。つまり，この図では｛bilaman｝を具現化された form として持つが，どのように名づければよいか不明な語（語彙）の一種がそこにあるということを表示している。このことは一見すると理論上問題になるように思われるが，WG ではノードの表記は便宜上のものでしかなく，理論上のノードの名称自体は特に理論的整合性に影響しない。この議論については，［Hudson 2007：19］を参照されたい。

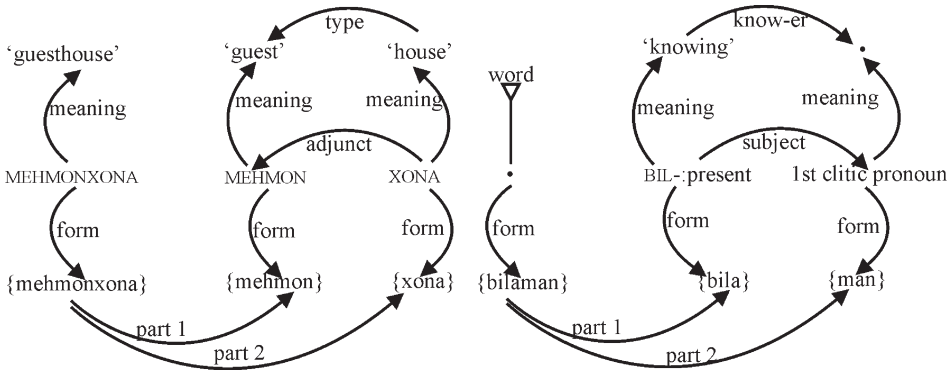

図６

接語とホストフォームとの関係についてはすぐ後で詳細に述べることにしたいが，ここでは複合語と同様に，ある語と接語が複合して一つのまとまった形式をなしつつ，統語的にはそれぞれが独立して互いに関係を有しているということがわかれば充分である。以上の説明から，接語・ホストフォームはどちらも，決してその場限りの便宜的な概念ではなく，言語知識を構成するネットワークの枠組みで他の言語学的概念と正確に関連付けられる。これにより，接語と語や接辞との類似性・相違性の説明が可能になるはずである。

接語の地位が確立されたところで，次に接語とホスト・フォームの関係について考察したい。既に述べたように，接語があるところには必ずホスト・フォームが存在することになる。したがって，接語の種類が何であれ，ホスト・フォームの内部には必ず一つ以上の接語が存在することになる。今, bil-a-man（'I know'）というウズベク語の動詞形があり，-man の部分が接語代名詞であるとしよう。このとき, ホスト･フォームとなるのは {-man} を一部として有する形式，すなわち {bilaman} 全体である。図 7 は，このことを WG の枠組みで示したものである。

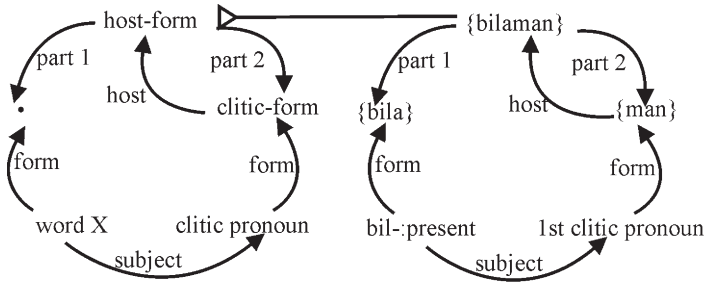

図７

図７の左側はウズベク語における，述語と人称接語により形成されるホスト・フォームの一般的・抽象的なネットワーク，右側の部分はより具体的な部分である bil-a-man（know-present-1sg,「私は知っている」）とのモデル・インスタンスの関係を明らかにしている。したがって，ホスト・フォームの一般的なネットワークについて言及しているの

が図の左側，そしてその一例であるホスト・フォームの｛bilaman｝についての情報は右側に描かれており，両者は前節で述べたモデル・インスタンスの関係，つまり“｛bilaman｝isa host-form”ということで，isa 関係で関係付けられている。図の左側では，まずホスト・フォームの最初の部分（part 1）は任意の語（Word X）が具現化された形式であり，同時に接語が付着する部分でもある。そしてそれに後続する部分（part 2）は接語の形式部分である。両者は形式的な観点からはホスト・フォームの内部構造の構成要素であるが，統語的には Word X と接語代名詞との述語－主語という典型的な統語的関係があり，そのことは統語的依存関係を両者に認めることで表示できる。図の右側，つまり｛bilaman｝はこのモデルが有する情報を全て継承する典型的な例であり，図の左側をより具体的に表示したものとなっている。接語と直前の語との統語的関係と同時に，形態論的な部分・全体の関係を同時に表示することで，接語の有する形式的な特徴を明らかにすることができるというのがここでの重要なポイントである。

ここまで述べてきたことは，以下のようにまとめられる。疑問接語をはじめとするいくつかの言語単位は，純粋に語彙的概念，あるいは屈折要素的概念だけでは捉えきれない。そこで，通常の語彙，屈折要素から逸脱する概念として接語という概念を用意し，この概念もまた，語の一種であると規定する。このことにより，接語が統語的に独立しているといった情報や，特定の意味を有するといったような特性が上位概念である語から継承（インヘリット）される。

(2) ホスト・フォームの内部構造

第２節で問題点として提示した，mi の生起位置をどのように予測するかという問題について，ここで具体的に論じてみたい。ウズベク語の人称語尾と疑問接語との相対的な順序を説明するには，統語的な観点だけではなく，ある語形式の内部序列規則を用いて説明していくことになる。ある語形式とは，ホスト・フォームであり，この内部構造を精密化して論じることにより，疑問接語 mi と人称語尾との相対的な位置を予測することが可能である。以下，具体的にホスト・フォームの内部構造を見ていくことにしよう。

最初に，非動詞述語（名詞述語，形容詞述語）と人称接語，疑問接語の相対的位置について考察しよう。(12a)（12b）の対比から明らかなように，ウズベク語の名詞述語に関しては人称接語と疑問接語の相対的位置はどちらが先行しても文法的に許容される。ただし（12c）のように，人称接語が２人称複数であることを示すために複数形接辞 -lar を用いる場合，疑問接語は人称接語に先行することが好まれ，そうでない場合は（12d）のように文法性が下がる。なお，人称接語 siz と lar は連続している必要があり，（12e）のように分離した場合は文法的でなくなる。

(12)

a. yaxshi-mi-siz ?
b. yaxshi-siz-mi ?
c. yaxshi-mi-siz-lar ?
d. ??yaxshi-siz-la（r）-mi ?
e. *yaxshi-siz-mi-lar ?

（12）の各例の形式は人称接語，疑問接語を含むホスト・フォームとして表示・説明することになる。すでに述べたように，ホスト・フォームには接語が最低一つ存在することが求められるが，当然のことながらホスト・フォームの内部に複数の接語が存在していても全く問題はない。

さて，（12）のいずれの例も述語形容詞 yaxshi とともに人称接語と疑問接語が共起しているが，これらの相対的な位置によって文法性に差が生じていることは，ホスト・フォーム内部の形態素配列論により説明可能である。ここでいう形態素配列論とは膠着する要素の順番について規定する枠組みであり，（13）で示すように，語幹を先頭に，各形態素の配列を番号で示すことが可能である。ホスト・フォームの表示で用いられる以下のスロットの番号（1(stem)，2(person)…）は，WG のネットワークにおいて形態論レヴェルでの part 1, part 2… といった形態素の配列の順序のネットワークに容易に互換可能である。[14]

(13)

a. 1（stem）2（interrogative）3（person）
yaxshi　mi　siz ?
b. 1（stem）2（person）3（interrogative）
yaxshi　siz　mi ?
c. 1（stem）2（interrogative）3（person）4（plural）
yaxshi　mi　siz　lar ?
d. 1（stem）3（person）4（plural）2（interrogative）
??yaxshi　siz　la(r)　mi ?
e. 1（stem）3（person）2（interrogative）4（plural）
*yaxshi　siz　mi　lar ?

14 （13）の各例では人称接語として２人称形式のみが提示されているが，もし今後の調査の結果，１人称形式の疑問接語の相対的な位置が，２人称の場合とは異なる結果になるならば，同じ人称接語でもそれぞれに異なるスロットの番号を認定する必要があるかもしれない。査読者の１名より，この相対的な位置の違いが統語構造・意味構造に影響を与えるのではないかという指摘を得たが，この指摘は十分正当であるかもしれない。このことについては稿を改めて論じることにしたいが，いずれにしてもここで重要なのは，少なくとも２人称の場合は同一の話者が人称接語が疑問接語に先行・後続した場合の両方の構造を許容するという事実であり，本稿ではこの事実の説明が WG の枠組みでは十分可能であるということを証明するにとどめておきたい。

（13）の各例から明らかなように，形態素配列論があらかじめ定められた順序に従っていればその形式は文法的であることが保証されるが，（13c）のように人称接語が複数形接辞を伴う場合は必ず疑問接語に後続しなければならない。したがって，この順序付けを守っていない（13d）は文法性が極端に落ちる。（13e）はさらに複数形接辞が人称接語から分離してしまっており，（13d）よりもさらに非文法的である。繰り返し述べるように，重要なことは人称接語と疑問接語の相対的な位置は統語論的にではなく，形態論的に決定されるということである。単純に統語的にこの問題を解決しようとすれば，たちまち複雑な統語的関係が生じ，このことを要素の移動あるいは変形等の抽象的な概念を用いて解決しなければならなくなる可能性も生じてしまう。

次に，述語部分が動詞の場合でも，ホスト・フォーム分析が有効であることを見ていこう。（14）では，動詞語幹に後続する TAM 形式の種類に従って，４種の人称系列をⅠ類から順にそれぞれ用いたものである。

（14）

a. so‘ra-gan-siz-mi？/ so‘ra-gan-mi-siz？（type Ⅰ）
ask-Perf-2sg-Q / ask-Perf-Q-2sg
「（あなたは）質問しましたか？」

b. ko‘r-a-siz-mi？/ *ko‘r-a-mi-siz？（type Ⅱ）
see-Pres-2sg-Q　see-Pres-Q-2sg
「（あなたは）見ますか？」

c. ko‘r-di-ngiz-mi？/（*/??）ko‘r-di-mi-ngiz？（type Ⅲ）
see-Past-2sg-Q　see-Past-Q-2sg
「（あなたは）見ましたか？」

d. so‘ra-y-mi？/ *so‘ra-mi-yay？/ *so‘ra-mi-ay？（type Ⅳ）
「（私が）質問しましょうか？」

これらの例をホスト・フォーム内部の厳密な内部構成規則を用いて説明すると，それぞれ（15）のようになる。ここでもホスト・フォームの内部構造は，どのような要素がどの順番で生起するかを，番号つきのスロットで表示するという単純な手法で充分表示できる。

（15）

a. 1（stem）2（TAM）3/4（Person）3/4（question）
so‘ra　gan　siz　mi？

a’. 1（stem）2（TAM）3/4（question）3/4（person）
so‘ra　gan　mi　siz？

b. 1（stem）2（TAM）3（person）4（question）
ko‘r　a　siz　mi？

b'. 1（stem）2（TAM）*4（question）*3（person）
*ko'r a mi siz？
c. 1（stem）2（TAM）3（person）4（question）
ol di ngiz mi？
c'. 1（stem）2（TAM）*4（question）3（person）
*ol di mi ngiz？
d. 1（stem）2（TAM：person）3（question）
so'ra y mi？
d'. 1（stem）*3（question）2（TAM：person）
*so'ra mi -ay？

完了形接辞が用いられ，これにより人称語尾としてtype Ⅰが用いられている（15a）の例では，前述したように人称語尾，疑問接語のどちらが先行しても文法的である。従ってホスト・フォームの内部構造は（15a，a'）で表示されたとおり，どちらの場合でも文法的である。一方，同じ人称語尾の形式を有していても，疑問接語は常にtype Ⅱ型の人称語尾に後続しなければならない。このことを（15b, 15b'）で示したとおりである。また，人称語尾には人称接語と人称接辞の両方が存在することをすでに述べたが，type Ⅲ，type Ⅳの人称形式は明らかに人称接辞と言うべきものであり，常に接語miに先行しなければならないことが（15c-c'，15d-d'）でそれぞれ明らかになっている。

ここまでの議論の要点をまとめておこう。まず，疑問接語miはホスト・フォームの一部であり，ホスト･フォームが有する厳密な内部序列規則に従わなければならない。また，ホスト・フォームの内部序列規則は語幹に直接後続するTAM形式が何かによって変化する。これにより，どのような人称形式が選択されるか，疑問接語との先行・後続関係はどのようになるかが決定される。これにより，人称語尾がⅠ類とⅡ類のどちらを選択するかにより疑問接語がどこに生起するかが説明できる。さらに，Ⅲ，Ⅳ類の系列が接語代名詞でなく人称接辞であることを第２節ですでに述べたが，疑問接語がなぜ常にこの人称接辞に後続するかはこの時点ですでに説明可能である。既に言及したように，接語は屈折接辞の外側に生じるという一般的な傾向がホスト・フォーム内部の形態素配列論によって保証されるからである。以上の枠組みにより，人称形式が接語であっても接辞であっても，統一的な手法で疑問接語との相対的な位置を説明することが可能となる。

(3) 統語的依存関係と形態素配列論を含む複合的なネットワークによる説明

ここまで，疑問接語miが音韻・形態論上より大きな単位，つまりホスト・フォームの一部として振舞うことを述べてきた。これらの形式に関する情報と同時に，第３節で提示したような統語的情報，またmiによって表示される疑問のスコープについて理論的に明らかにする必要がある。

まず，統語的情報の表示について明らかにしておこう。WGでは統語関係は，多くの理

論が採用している句構造的階層関係ではなく，単語どうしの依存関係として表される。[15] ある語 X が別の語 Y に統語的に依存するとき，WG では図 X のように，Y が統語的に X を支配していることを表示する形で，Y から X に向かって曲線の矢印が表示される。

たとえば，言語一般に限定形容詞は名詞に依存するが，その具体例として，英語で形容詞 good が名詞 books に依存するとしよう。以上のような「言語知識」を英語話者が有しているとすれば, その依存関係は言語知識のネットワークとして図８のように表示される。

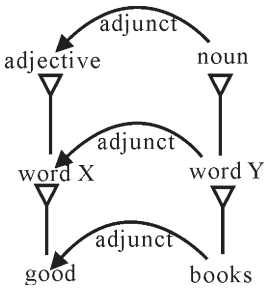

図８

ここで，ウズベク語の疑問接語に話を戻そう。疑問接語，あるいは疑問接語と人称接語と動詞部分がどのような統語的情報を有しているかについては，すでに第２節である程度議論を行った。そこでは，疑問のスコープの説明という点や，ウズベク語の強い主要部後置の傾向を含むいくつかの点が指摘できるにもかかわらず，疑問のスコープは疑問接語の生起位置ではなく，音韻論的強勢の位置によって表示されること，また疑問接語の構文における義務的生起性の欠如，そして他の WH 詞との共通性の表示，さらに統語的連続性の問題などを考慮に入れると，疑問接語 mi は直前の語に依存していると説明したほうがよいと結論付けられた。したがって，今先ほど述べた依存関係の枠組みを援用するなら，mi と直前の語は，WG のネットワークの枠組みでは，直前の語から疑問接語 mi へ向かう曲線の矢印で表わされることになる。

mi が他の語に対して有する統語論的依存関係とあわせて，疑問のスコープを考慮に入れるという意味では意味論的情報，またここまで議論してきた接語とホスト・フォームとの形態論的関係を加え，さらに接語の重要な特徴の一つ，つまり音韻論的強勢の位置が接語の直前に来ることを全て説明することで，接語の諸特徴を同時に，かつ統一的に説明することが可能である。従って，本稿の冒頭部分で提示したウズベク語の構文（16=1）のような例については，疑問接語に関連するネットワークを中心に，図 9 のように表示す

15　統語論的説明において，生成文法の枠組みでは（または，おそらく句構造を基礎とする理論的枠組みのほとんどにおいて）X-bar 理論を用いることにより，全ての句が伝統的な構造言語学で言う内心構造を有していると仮定している。同じく依存関係を基礎とするアプローチにおいても，ある主要語（WG の用語では parent）とその依存語（同じく WG で言う dependent）とが作り出す構造は全て内心構造を有していることになる。従って，ここでの議論において内心構造，外心構造の区別の有無は問題とはならない。

ることが可能である。

（16=1） Ota-ngiz kecha xotin-im-ni ko‘r-di-ngiz-lar-mi？
father-2sg yesterday wife-1sg-Acc see-Past-2sg-Plu-Q
「あなたのお父さんは昨日私の妻に会われたのですか？」

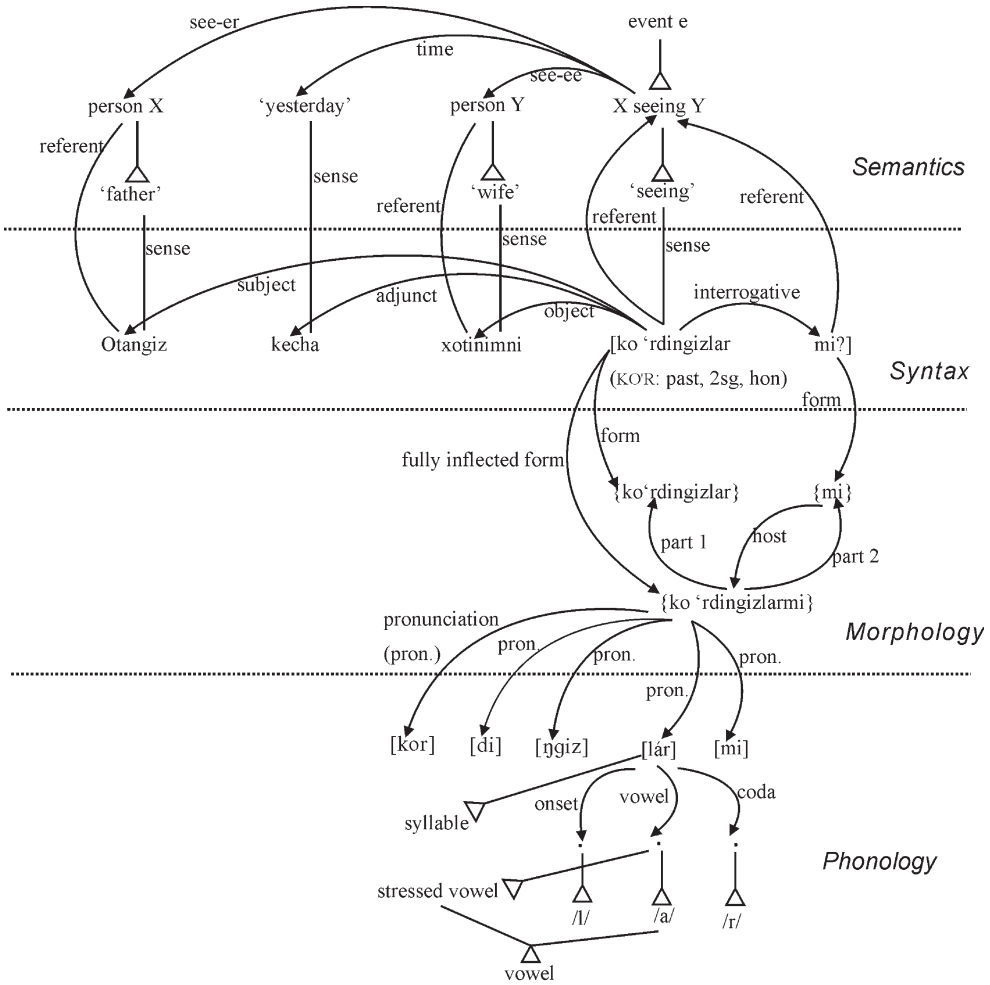

図９

図９は，視覚的に意味構造を最上部とし，順に統語論的情報，さらに形態論的情報，最後に音韻論的情報の順に下に続いている。

まず図９の意味構造は一見すると複雑な構造をしているが，ここで重要なのは疑問のスコープの範囲がこの場合は直前の語，つまり述語に及んでいることを表示している部分である。mi 自体は意味論上典型的な語と違い，語義（sense）あるいは指示対象（referent）

を有しているかどうか議論する必要があるが，疑問接語がある概念を指し示して，その概念が真であるかそうでないかを表示する機能があると仮定すると，意味論上では直前の述語が表す意味（“X seeing Y”の部分）を直接指示対象とすると表示できる。このことにより，この構文では疑問のスコープが述語の表す意味そのものであることが表示できる。

意味構造の一段下に表示されている統語構造では，これまで論じてきたように疑問接語が直前の語に統語的に支配されているという依存関係が，述語部分から疑問接語へと向かう，interrogative とラベル付けされた曲線の矢印で表示される。このような分析は，結果的に主要語が依存語に後続する傾向がきわめて強いウズベク語において例外的な現象となってしまうため，整合性を欠くという批判がなされるかもしれない。しかし，ここまでの観察から明らかなように，mi の振る舞いは通常の統語論的説明ではその位置を説明することが困難であり，むしろその位置は統語的にではなくホスト・フォームの内部構造（形態論）の枠組みで説明されるほうが容易であると述べてきた。このような接語は，いわば［Zwicky 1977］の用語でいう special clitics の 1 例であり，チュルク諸語に限らず多くの言語で見られる言語単位である。たとえばフランス語の Paul en mange deux. “Paul eats two of them.”の例でいう en はまさに special clitics の 1 例であり，この en の位置は統語的には不連続構成素を形成してしまうため，統語的にというよりもむしろ形態論的に説明されるほうがより適切と思われる。

また形態構造では，形式 {mi} はこれまで述べてきたようにより大きな形式 {ko'rdingizlarmi} の一部となっていることに加え，すでに述べたように前項（2）で述べたホスト・フォームの形態素配列論も，part 1, part 2 などのリンクにより明らかにされる。したがって（13）や（15）で提示したようなホスト・フォームのスロット内部の形態素配列論が言語知識として所有されていれば，その番号に従って WG のネットワークの一部として part 1, part 2... という形で表示可能となる。さらに音韻論レベルの構造では，/mi/ の直前の音節 /lár/ が強勢を受けることが表示されている。以上の枠組みにより，WG の枠組みでは，ウズベク語の mi が単に接語であるというだけでなく，mi が生起したことによって直前の語（の最終母音）が強勢を受けるという言語事実が説明可能となる。

ウズベク語の疑問のスコープについては，もう少し議論しておかねばならない。つまり，トルコ語と違って疑問接語 mi は文末の位置にとどまっているため，構文中の任意の語のみを疑問のスコープに入れる場合，それを音韻論的語強勢によって具現化するということを理論的にどのように表示するかを明らかにしておきたいところである。そこで，強勢の位置が変化した（11b）の例を再び見てみよう。

（17）　（=11b）**SIZ**　1977-yilda　tug'il-gan-mi-siz？
You-Nom　1977-year-Loc　give birth-Pass-Perf-Q-2pl
「<u>あなたが</u>1977 年に生まれたのですか？」（下線部が強調されている）

（17）では疑問のスコープは文頭の主語 siz に限定されている。このことを，WG によ

る枠組み，つまり図９と同様の手法で簡略的に表したのが図 10 である。

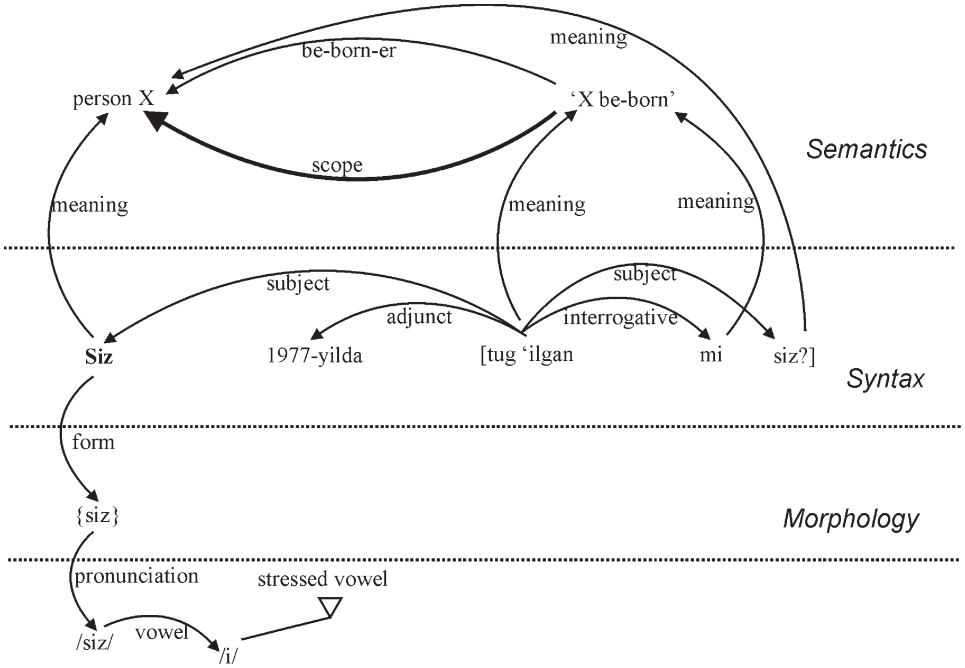

図 10

図 10 では，やはり統語上独立した tug‘ilgan, mi の２語が意味構造では述語部分の意味を表すことが表示されており，問題になっている疑問のスコープは主語 siz が指し示す人物に対して，他のリンクと同じく，“scope”とラベル付けされたリンクで表示できる。なお，scope というリンクは疑問以外にも数量詞のスコープなどにも使用可能な概念であり，この意味で，疑問のスコープを表示するためだけのその場しのぎの理論的枠組みを設定せずともよいと思われる。[16]

以上のように，音韻論的情報から意味論的情報までを一度に，かつ統一的な手法で表示できるという点で，WG による分析は伝統的な記述文法よりも圧倒的に優れているはずである。また，今後の研究成果を待たねばならないものの，本稿で提示した分析は多くの競合する文法理論，とりわけ言語レヴェルを独立したモジュールのように考える生成文法的アプローチと比較しても，音韻レヴェルから意味レヴェルまでの統一性，接語の特性の明示化という点においては，十分に競合可能な説明力を備えていると思われる。

16　単なる表記上の好みの問題かもしれないが，図 10 ではわざわざ動詞の意味と主語の意味との間に“scope”という独自のリンクの矢印を描かずに，単に“be-born-er”という意味関係のリンクを太線で表示し，そのリンクが“be-born-er”及び“scope”であるというように表記するだけでも十分かもしれない。

6．結語

本稿では，以下のことを明らかにした。まず，ウズベク語の疑問不変化詞 mi は音韻・形態論的には別の語の一部であるかのように振舞いながらも，統語的には独立して機能する。このことこそ疑問接語 mi について説明されるべき最も重要な特徴であり，WG のネットワークの枠組みで，接語の音韻論上の強勢位置に関する振る舞いや形式上の接辞的振る舞い，統語論上の独立性，さらには意味上のスコープの表示といった情報を一度に表示することにより，その形式・機能上の特徴を容易に記述・説明することができることを論じた。

疑問接語 mi と人称語尾との相対的順序の説明は一見すると困難な問題のように思われるが，実際には簡潔に「疑問接語は別の形式，WG の枠組みではホスト・フォームを構成する一部分であることにより，厳密なホスト・フォーム内部の序列規則によって生起位置を規定される」と説明できる。同様に疑問接語と人称接語の最終的な位置を決定するのは，述語の要求する時制・相・法接辞が何であるかによって決まる。このことはウズベク語が強い主要部後置現象を有していることを考えると，純粋に統語的な説明だけではこれらの要素の生起位置を予測するには不十分であり，形態論的な説明と統語的説明とを相互補完的な形で行うべきことを示している。WG の枠組みでは接語・ホスト・フォームを用いた分析がこの問題に対して有効であり，これによって疑問接語 mi の形式的特徴や生起位置が正確に表示または予測されることが可能となる。

参考文献

Besler, D., 2000, Soru eki -mI'nin sözdizimsel özellikleri（Syntactic Properties of the interrogative suffix -mI in Turkish）. In Özsoy, S. and Taylan E.（eds）*XII. Dilbilim Kurultay Bildirileri*. pp. 65－70.

Bodrogligeti, A., 2003, *An Academic Reference Grammar of Modern Uzbek*. Lincom, Muenchen.

Erdal, M., 2000, Clitics in Turkish. In Aslı Göksel and Celia Kerslake（eds.）*Studies on Turkish and Turkic Languages*. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden, 41－48.

Good, J. and Yu, A., 2005, Morphosyntax of two Turkish subject pronominal paradigms. In Lorie Heggie and Francisco Ordóñez（eds.）*Clitic and Affix Combinations*, J. Benjamins, Amsterdam, 315－341.

Hudson, R. A., 2001, Clitics in Word Grammar. *UCL WPL* **13**. 243－294.

―― 2007, *Language* Networks. Oxford University Press, Oxford.

Kornfilt, J. 1997, *Turkish*. Routledge, London.

Lamb, S., 1966, *Outline of Stratificational Grammar*. Georghtown University Press, Washington.

Raun, A., 1969, *Basic Course in Uzbek*. Indiana University, Bloomington.

Sjoberg, A. F., 1963, *Uzbek Structural Grammar*. Indiana University, Bloomington.

Tog'aev, T. et al. 2004, *O'zbek tilining kirill va lotin alifbolaridagi imlo lug'ati*（*Orthographic dictionary of Cyrilic and Latin alphabets in Uzbek*）. Sharq, Tashkent.

Uzun, N. E., 2000, *Evrensel Dilbilgisi ve Türkçe*（*Universal Grammar and Turkish*）. Multilingual, Istanbul.

Yoshimura, T., 2005, On the order of the TAM marker, the question particle *mI* and the personal

suffix in Turkish. *Kobe City University Journal* **56**－2, 195－211.
吉村　大樹，2007a,「トルコ語の属格名詞の独立性と疑問接語の生起位置」,『日本言語学会第 134 回大会予稿集』. pp. 120－125.
吉村　大樹，2007b,「ウズベク語の疑問詞 mi―Word Grammar の立場からの分析―」，大阪外国語大学言語社会学会 2007 年度研究大会口頭発表論文.
吉村　大樹，2008,「トルコ語とウズベク語の疑問接語 mI/mi は文法的に異質か」,『日本言語学会第 137 回大会予稿集』. pp. 268－273.
Zwicky, A., 1977, *On Clitics*. Bloomington：Indiana University Press.

（2008. 12. 24 受理）